

慶應言語学コロキウム

フェイズと転送領域

—照応形束縛とA移動の局所性からの考察—

講師: 斎藤 衛 氏 (南山大学 人文学部 教授)

日時: 2017年3月18日(土)・19日(日) 14:00-18:30

会場: 慶應義塾大学三田キャンパス北館3階大会議室

参加費無料 事前申込不要

※会場にて参加者カードへの記入が必要となります

Quicoli (2008)、Charnavel and Sportiche (2016) などが、照応形束縛の局所性をフェイズ理論から導く試みを提示している。本論は、時制の ϕ 素性一致を欠く文においてはNIC効果がみられないとするLGBの一般化を出発点として、Quicoliの提案を発展させることをめざす。

上記の一般化は、(i) に示すように、CPフェイズが完成した時点で、 ϕ 素性一致がある場合にはTP、ない場合には νP が解釈部門に転送されることを示唆する。

(i) a. $[_{CP} [_{C} [_{TP} \text{subject} [_{T_{+AGR}} [_{\nu P} \dots]]]]]]$

b. $[_{CP} [_{C} [_{TP} \text{subject} [_{T_{-AGR}} [_{\nu P} \dots]]]]]]$ (order irrelevant)

ここから、(i)の非対称性を軸として、フェイズと転送領域を再考することが理論的課題として浮かび上がる。本論では、Chomsky (2000)の仮説を復活し、フェイズの補部ではなくフェイズそのものを転送領域とするBoskovic (2016)を採用して、この問題を追求する。具体的には、フェイズの完成に伴い、直下のフェイズが転送されることを提案する。

次に、この提案に基づいて、照応形束縛とA移動の局所性を捉え直し、非対格 ν もフェイズ主要部となること、ECM補文がCPであることなどを帰結として提示する。さらに、(i)により、Hornstein (1999)が提案する制御の移動分析とフェイズ理論の整合性が得られることを指摘し、前者について詳しく論じる。また、Aスクランプリングの局所性や非適正移動の分析に関する諸問題をとりあげて、極小主義理論において柱となるフェイズとラベリングの「役割分担」についても考える。

主催: 慶應義塾大学言語文化研究所

協力: 慶應義塾大学次世代研究プロジェクトB

科学研究費補助金・基礎研究(C)「統語構造を派生するメカニズムの解明、及びその理論的帰結の探求」(研究代表者: 北原久嗣)

<お問い合わせ先>

〒108-8345 港区三田 2-15-45 慶應義塾大学言語文化研究所

電話: 03-5427-1595 (事務室直通) メール: genbu@icl.keio.ac.jp

<http://www.icl.keio.ac.jp>